死を受け入れる「死考」とは？

「死考」とは、死について思考することを指す語である。この語は、坂口安吾作『太宰治情死考』という随筆のタイトルによって登場した。坂口は、終戦直後に若者に人気を博した無頼派に属す、太宰治と盟友であった人物だ。太宰は「小説が書けなくなった」と遺書を残したが、坂口はこの理由を「芸道人の身悶」と一蹴する。

小説が書けない、というのは一時的なもので、絶対のものではない。こういう一時的なメランコリを絶対のメランコリにおきかえてはいけない。［坂口安吾『太宰治情死考』1948］

死を思考することが、「死考」である。しかし、死を考えるという行為は死を望むことではない。「死にたい」という気持ちを否定はしないが、「殺してやる」と言われたならば、どうだろうか。多くの人は「殺さないでくれ」と命乞いをすると思う。自殺願望という心のピークは、5分ほど。坂口的に言うと、一時的なメランコリである。人はこういった場合、真に「死にたい」のではなく、現実から「逃げたい」だけである。それを死考と履き違えてはいけない。

では、死考とは一体どのような行為なのだろうか。ここでは、私の考える死考に近しい「死隋念／マラナサティ」と「メメント・モリ」を例に挙げる。死隋念とは、仏教における死の瞑想や死の観察を指す。つまり、「どんな生命でも死ぬ」という事実を自分なりに観察することで、死を死として受け入れられる。仏教には「無常」という言葉がある。物事は、瞬間瞬間に常に変化しているという意味だ。今、生きているこの瞬間も、秒単位で変化が起きている。わずか1秒後でさえ、どうなるかわからない。1秒後に生きている確証はなく、一方で、目立った変化もないかもしれない。しかし、確実にその進んだ時間の分、死に近付き、老いている。仏教では無常を理解し、死を受け入れることによって、「今」という生をも、そのままに受け入れてきたのだ。一方、メメント・モリとは、「誰もが必ず死ぬことを忘れるな」「死を想え」という意味のラテン語だ。古代ローマ時代、キリスト教を経て、その意味を微妙に変えながら、現代では、「死を意識し、今を大切に生きること」という意味で用いられる。2005年、スタンフォード大学の卒業式でスティーブ・ジョブズは学生に向けてスピーチを行った。癌と診断され、闘病していたジョブスの言葉は現代のメメント・モリの解釈に影響を与えている。

自分はまもなく死ぬという認識が、重大な決断を下すときに一番役立つのです。なぜなら、永遠の希望やプライド、失敗する不安……これらはほとんどすべて、死の前には何の意味もなさなくなるからです。本当に大切なことしか残らない。自分は死ぬのだと思い出すことが、敗北する不安にとらわれない最良の方法です。

［スティーブ・ジョブズ『ハングリーであれ。愚か者であれ。スピーチ全訳』日本経済新聞］

このように「死隋念／マラナサティ」、「メメント・モリ」ともに死を受け入れ、今という生を大切にすることを説いている。宗教性を感じさせず、現代に適応した率直な行為という意味を持たせるために、今研究では「死考」と言う言葉を選んだ。死考も同様に死について考え、「生」に自分なりの意味を見出し、受け入れることである。「死」という避け得ることのできない平等を受け入れた時、より鮮明になる「生」の尊さ。今日という日を一生懸命に生きるきっかけとなる。命が有限であることが、世界の美しさに気付かせてくれる。

なぜ人は死者を弔うのか？

人は、なぜ死者を弔うのだろうか。科学的に考えれば、死者は土へと帰る無生物であり、そこに意思は存在しない。しかし、私たち人間にとって、死者は過去を生きたその人そのものであり、生者とは違う形で「あの人であれば、こうしていただろう」と、考えや行動に影響を与えてくれる。人は死によって、跡形も無く、消滅することはない。亡くなった後でも、生きている人の記憶の中で存在し続けるのだ。

フランスの哲学者のウラジミール・ジャンケレヴィッチは、死を考える際の指針として三つの「死の人称」を定義した。まず、「1人称の死」、自身の死である。自身の死は、絶対性と不可知性という性質を持つ。自身の死は必ず訪れるが、自分の死を知覚することはできない。例えば、自分の遺体を見ることも葬儀を行うことも自分自身には不可能であるからだ。次に、「2人称の死」、近しい人の死である。親子や兄弟姉妹、恋人、友人など人生を分かち合った人々の死は、喪失経験と大きな悲嘆を残し、人生に大きな影響を与える。そして、「3人称の死」、他人の死である。第三者の立場から冷静に判断することができ、多少なりとも心が動かされても翌日以降の生活が劇的に変わることはない。一般的に人々の「弔い」の対象になるのは、この定義に基づくと「2人称の死」を遂げた近しい人に対する人である。その人の科学的な「死」からどんなに時間が掛かろうと向き合い、生前とは違う新しい関係性を作り上げていく。もちろん、「3人称の死」、他人の死についても人々は弔う。大震災や戦争など多くの人々が亡くなると、石碑や公園を作り、慰霊を行う。起こってしまった悲しい過去と向き合うのである。

人類が、まだホモ・サピエンスであった時代から、私たちは死者を弔ってきた。死者を埋葬し、花を添え、送り出す。この一連の儀式は、私たちが過去や未来といった概念を手に入れ、見えない世界へ心を伸ばしたことによって生まれた。弔いは、過去を今の私たちが受け取り、未来へとつないでいくためにある。生者のための、社会という循環する共同体のための儀式である。弔いを続けることは、人が人であり続けるための行為なのだ。

近年、核家族化や都市化などライフスタイルの変化に伴い、弔いに対する価値観が大きく変わってきている。お墓までの距離や管理の大変さから、先祖のお墓を移動させる改葬や墓を閉じる墓じまいを選択する人が増えた。共同納骨堂や手元供養など、供養の形も多様化していている。一方で、改葬も墓じまいも行われず、何年もお参りの形跡のない無縁墓の増加も問題となっている。お墓だけでなく、引き取り手のいない遺骨も問題に挙がる。経済的に余裕があっても、既婚者であっても、親族との関係が疎遠だったために、死後、無縁遺骨となるケースは珍しくない。かつてより日本では、弔い／葬儀やお墓の管理は、血縁が担うという認識がある。実際には、血縁者だけでの管理が難しくなれば、共同体である「村」の住民が管理するなど、集団的な弔いが行われきた。哲学者の内山節は、著書『いのちの場所』で次のように述べる。

共同体はつないでいく社会なのである。世代から世代へとつないでいく。だからそのつなぎのなかで死もとらえていた。先祖たちはありふれた一生をやり遂げて、死者となっていった。そして自然と一体化していまの共同体を見守っている。このつながりのなかに加わっていくことが村での死の意味だ。だから人が亡くなったとき、葬儀は遺族が出すものではなく、共同体が出すものだったのである。（中略）共同体のメンバーとして送り出すのである。［内山節『いのちの場所』2015］

都市化や核家族化といった社会環境の変化に伴う人と人との繋がりの希薄化は、こういった共同体による集団的な弔いを失わせ、弔いを真に血縁者、親族だけの個々の役割にしてしまった。血縁者、親族のみでは、「死」を支え続けることはできない。どう死者を弔っていくか、今こそ、社会全体で考えていく必要がある。

死の問題について考える

背景 01　死と向き合う機会の減少

医療の発展

長寿化
治療可能な病気の増加

無宗教化

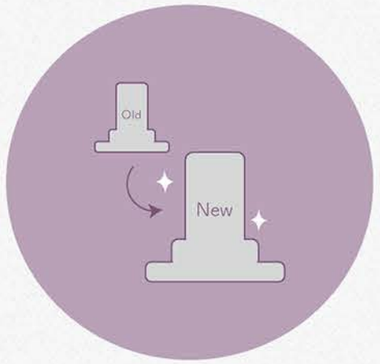
死や死後の世界の
意味付けの拠り所がない

人間関係の希薄化

親しい人の死の減少
看取る機会の減少

背景 02　弔いの変化

改葬



墓じまい

共同墓地や手元供養など、弔いの多様化が進む

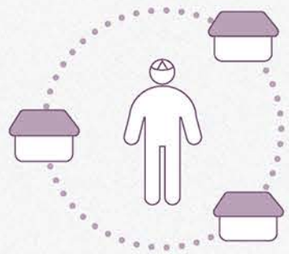
札幌市の年間火葬件数と
それに占める無縁遺骨の割合推移

データ引用：https://www.city.sapporo.jp/hokenjo/botikeiei/sousou_sapporo_kadai_bochi4.html

無縁墓や無縁遺骨の増加が、近年問題になっている

無縁墓や無縁遺骨の原因

昔



[村という共同体での弔い]

社会の変化

核家族化、都市化、過疎化

今

[限定的個人のみでの弔い]

負担が大きくなり、弔いの継続が困難になっている

□死の問題に向き合うきっかけ

現代社会には、死考や弔いの継続が難しくなっているという問題がある。本研究では、この問題に向き合うため、死考と弔いを醸成する空間を提案する。墓地や礼拝堂といった弔い空間の新しい姿を示すことで、「死をどう扱っていくか」という問題を個人や社会の問題として認識し、考えるきっかけを作りたい。「死考」や「弔い」の本質は心理的な概念であり、自身が思考することから始まるからだ。その思考のヒントとなるよう、本研究の探求プロセスなども提示する。

□生活に「死考」を取り込む

社会学の分野では、かつての死の身近さと比較し、医療技術の発展や核家族化、都市化に伴い、現代は死が遠いという見方が一般的だ。昨今では、死に関する書籍や終活も話題となるが、依然として、死を未来の話と捉えている人が多い。「死」は、立場も年齢も関係なく、誰にでも平等に訪れるものだ。「死」と向き合うことで、今の「生」にも向き合える。そのため、死と向き合う「死考」を醸成する空間を提案したい。

□死者への感情の置き場所

親しい人の死後、葬儀だけでは気持ちが整理できない人々が存在する。死者と生者の関係性の深さによっては、医学的な心肺停止の「死」と、その人が亡くなった事実を受け入れる「死」は全く違う認識であるからだ。弔いは、生者が死者の存在を再認識し、生前とは違う新しい関係を築くことで行える。悲しむ人々が親しい人たちの死を受け入れるために、「死者を思い、気持ちの整理を行う場所」、「死者への感情の置き場所」が必要である。

□個々での弔いから共同体による弔いへ

ライフスタイルの変化や無宗教化により、永代供養、樹木葬、散骨、手元供養など、葬送やお墓の在り方にも多様性が生まれてきた。一方、無縁墓や無縁遺骨が問題となり、血縁者、親族だけでは、「弔い」を持続的に支え続けることができなくなっている。この問題を解決するには、近年、日本が行ってきた血縁者・親族間のみでの弔い / 葬儀やお墓の管理から一歩踏み込み、もっと大きな集団 / 共同体で死者を弔うことが必要である。

死考と弔いの空間

対象敷地・青島

鳥取県鳥取市にある日本最大の池・湖山池に浮かぶ島

面積 1.47 ㎢、周囲 1.8km

□様々な伝承が残る土地

中国地方は古来日本の中心地であり、さまざまな伝承の舞台になっている。鳥取県は、という日本神話の舞台。湖山池の成り立ちにも「湖山長者」という伝承が残る。

□中心地からの距離感

鳥取県の中心地から、車で 10 分ほどと利便性が良く、島が浮かぶ湖山池の周辺も住宅街である。死考と弔いを日常に取り込むために「訪れやすさ」は重要な意味を持つ。

□他界化信仰に最適な空間性

居住地に程近い距離感と独立した空間性を持つ他界化信仰の「あの世」の条件に当てはまる。島を囲む水は三途の川のようにこの世とあの世の境界線として見立てられてきた。島内では青島遺跡という遺跡があり、祭祀跡が発見されている。

遺体を堆肥化し、島で個人で花を育てる
Natural organic reduction

旅する弔い

島内の区画で育った
花の種が、遺族にとって
身近な故人の象徴となる。
種を通し、弔いがどこでも
可能になっていく。

葬送システム「かれたとて」

花が枯れたとて
この地から離れたとて
種という「今」の命によって、
受け継いでゆく新しい弔いの形

弔いコミュニティ

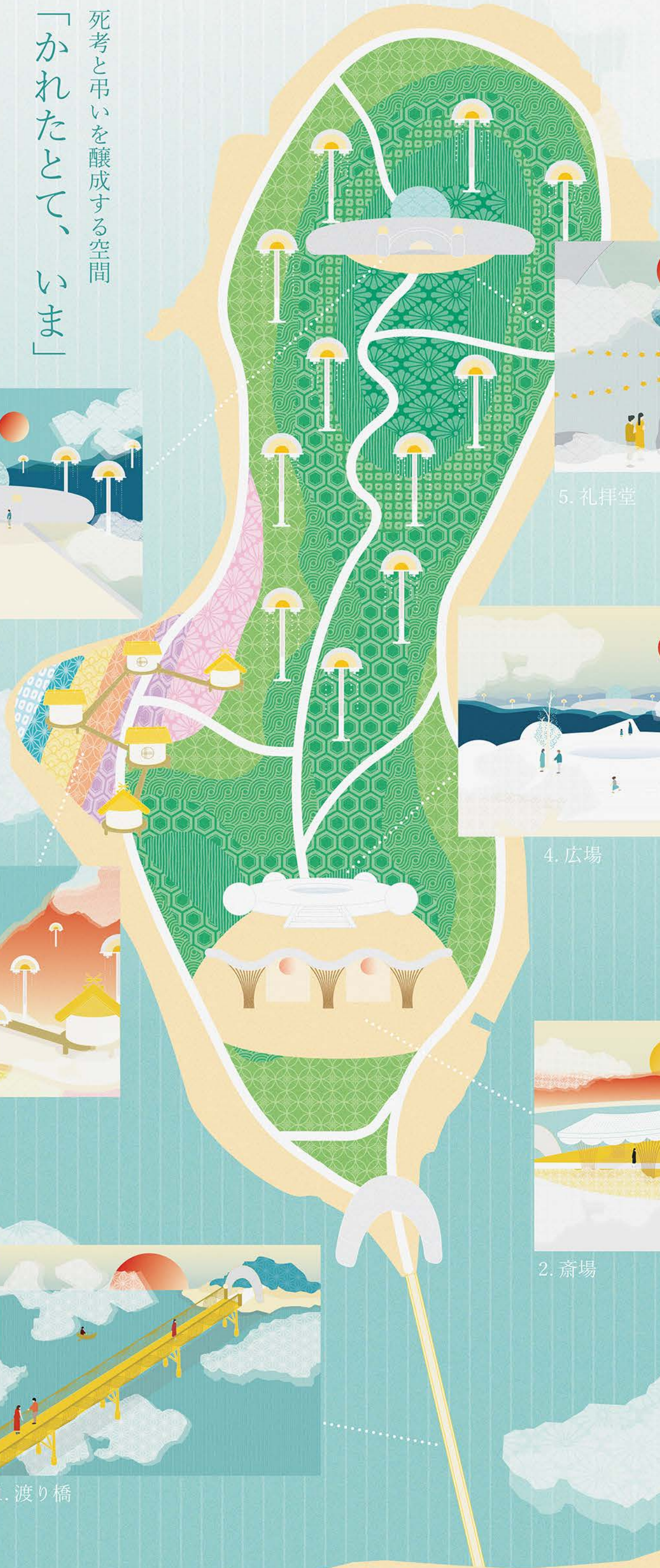
島の棚田で花を育てる、
「弔い」を目的とした
コミュニティ。
花の世話以外にも、
墓友として交流を重ねる。

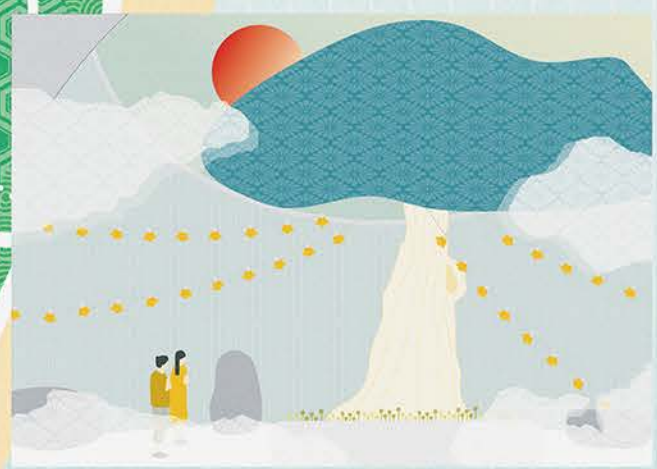
死考と弔いを醸成する空間

「かれたとて、いま」

死の問題について、私たちは
どんな未来を描くだろう。
死考離れや変化する弔いを問う
死考と弔いを醸成する空間。

5. 礼拝堂





5. 礼拝堂

4. 広場

3. 支度庵

2. 斎場

1. 渡り橋

全体マップ

渡り橋

蓮の根から生まれる
蓮糸・ハチスノイトは、
あの世とこの世を繋げるという。
始まりも終わりもなく
紡がれた橋のその先は、
巡りゆく死考と弔いの島。

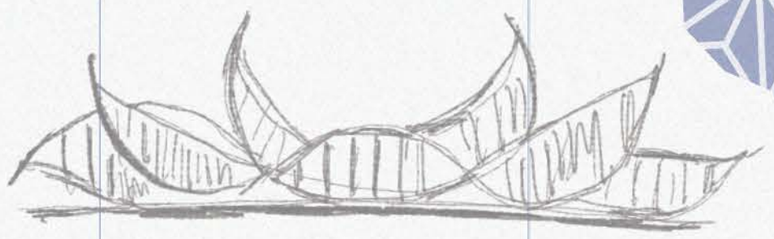
ハチスノイト構想

Lotus flower

continuity

□造形の構想

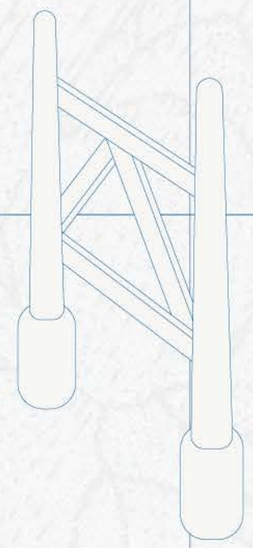
蓮の花の形状から、
スケッチを重ね、
装飾を考える



蓮をイメージした
橋のスケッチ → DNA の二重螺旋構造に発展

□橋の象徴性

橋は神話や伝説に
たびたび登場し、
天と地を結ぶ象徴性を持つ

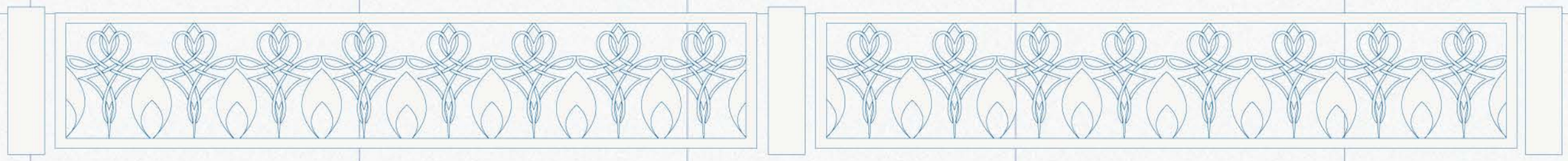


□ケルティック・ノットを作成

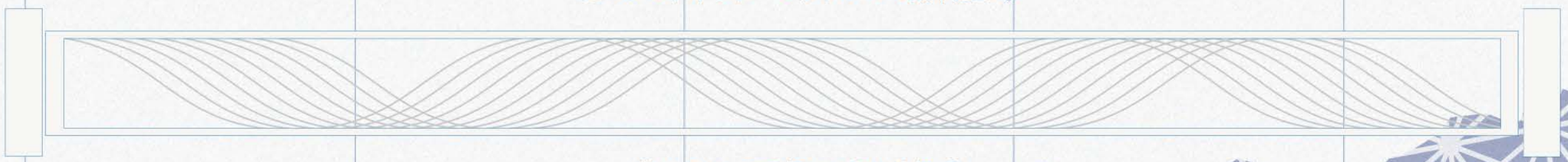
永続性の象徴を示す
ケルティック・ノット
一本の紐で構成された
始まりと終わりが無い模様

□橋のスケール

ヒューマンスケールの歩道幅
死考と弔いの空間では、
車両は入らず、歩行者のみ



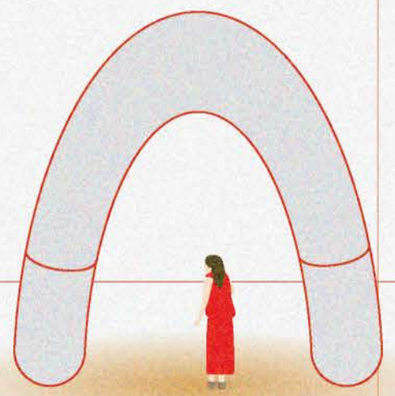
蓮のケルティック・ノットからの装飾構想 ①



蓮と DNA を連想した装飾構想 ②

門・子の宮

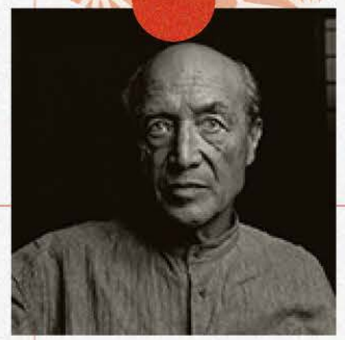
□イサム・ノグチ 未完の慰霊碑
『広島の死者のためのメモリアル』オマージュ



ノグチの慰霊碑は、古墳の頂上に
置かれる家形のハニワをモチーフとしている。

《広島の死者のためのメモリアル》の地上の
台座部分を古墳のマウンドに見立て、平和記
念公園という墓のランドマークに考えていた。

その慰霊碑を鳥取県佐治町で採れる「佐治石」
を用いて、弔いの場の者にオマージュする。

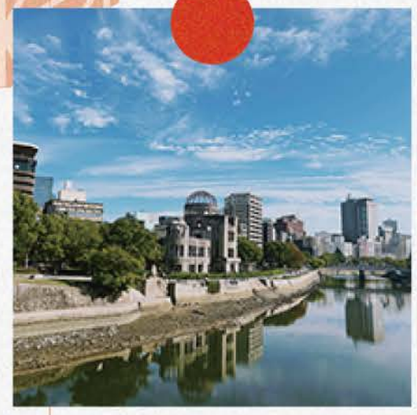


イサム・ノグチ（1904-1988）アメリカ合衆国
ロサンゼルス生まれの彫刻家、画家、インテリア
デザイナー、造園家・作庭家、舞台芸術家。

イサム・ノグチ《広島の死者のためのメモリアル》
石膏（せっこう）モデル、1951-52 年。石膏、彩色、
52.4×58.5×28.6cm、神奈川県立近代美術館蔵。
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum,
New York/ARS-JASPAR

『慰霊碑は遺族の慰めの場所であり、来たるべき生命を暗示させる場所なのだ』
生死について考え、なおかつ未来の子孫に期待を巡らせるような瞑想の場所

参考：NHK 国際報道 2023 「イサム・ノグチ 幻の慰霊碑に込めた思い」



□10 月広島平和記念公園を訪れて

10 月中旬に広島平和記念公園に向かった。日本人として、弔いの場を卒業研究に選んだ学生として、
訪れるべき場所だと思ったからだ。覚悟はしていたが、資料館や公園から伝わってくる悲劇に耐えかね、
元安川のほとりのベンチでしばらく放心していた。
瀬戸内気候の柔らかな太陽に反射し、美しく輝く川も、あの日は多くの人々が亡くなったと思うと、
今日の平和が不思議に思える。「伝え継ぐ」その大切さを改めて考えた日だった。

斎場

最後のお別れは、
貴方との関係に
新しい名前をつけた時。
けれど不思議と、
世界のどこかに
その存在を感じます。

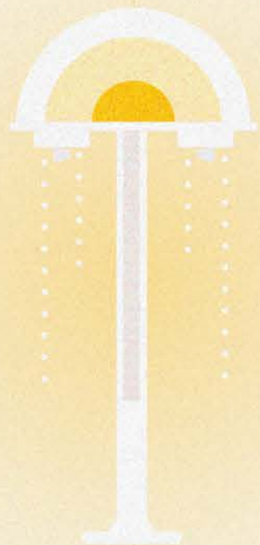
広場

旅立ちの場所へと続く
この先の道のりで、
どうか柔らかな魂に
彷徨うことなき道標。

支度庵
風となって、翔ぶため
陽となって、照るため
水となって、巡るため
過去と未来を
繋げる世界の一部に
還る支度をこの場所で

Natural organic reduction

遺体の有機還元葬



⑴コンポスト専用の棺に遺体を入棺

遺体はウッドチップなど堆肥化を促進する有機物が敷き詰められた、コンポスト専用の棺に入棺される。こういったコンポスト化までの準備を支度庵で行う。

⑵ 49 日間、カプセルの中で堆肥化

棺ごとコンポストを行う専用のカプセルに 49 日間入れる。カプセル内は微生物やバクテリアが活動しやすい環境に整えられ、効率的な分解が促される。

⑶ 購入した区画に散布し、花を育てる

コンポストが行われ、遺体は堆肥化する。この堆肥は、島の棚畑に散布され、死者を表す花の成長を促す。花の世話と種を引き継ぐことで、持続的な弔いを目指す。

棚畑の花

□春

アイリス、ハマナス、
ペンステモン、バラ

□夏

アベリア、ヨツバヒヨドリ、
ホタルブクロ、アガパンサス

□冬

ツバキ・サザンカ

□花の種類の例

亡くなった季節の花や誕生日花、
好きな花を選ぶことができる。

遺体の堆肥から、死者が選ぶ花、
そして、生者が受け取る種や球根
へと命が循環していく。

□秋

イソギク、サンインギク、
ノコンギク、リュウノウギク

©pixabay.com

礼拝堂

澄んだ輪・リンの音に乗せ、
供養や祈りが世界に響く。
ここで眠る人々に
これから生きていく人々に
私達の想いが届きますように。

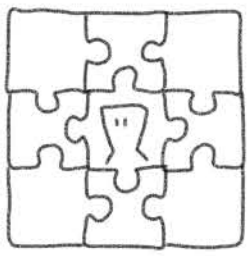
礼拝堂

礼拝堂の中には、
「かれたとて、いま」の
象徴となる楠が育ってゆく。
その姿に時の流れを思い、
私達は死考と弔いを重ねる。

徒然落書き帳
「真夜中の圧迫」

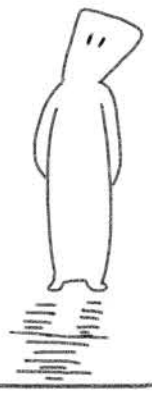
「一人でいても二人でいても、
十人でいても
寂しいものは寂しい。」

でも、この人生は
何かを繋いでゆく
ピースでもあるのです



夜になると、
途端にさみしい

本当にそうで、
人は結局は孤独です。



こうして、生きていて
何かを書いたり、
作ったり、
考えたり…

誰かに会いたいとか、
そんなさみしさではなく、
ひたすらに「自分」という
存在がさみしくなる

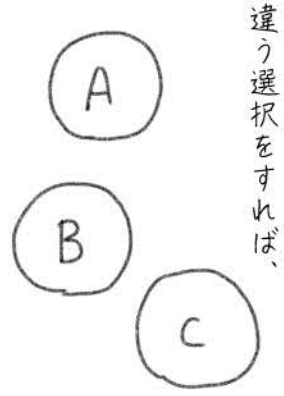
このさみしさの正体に
気付かず、
大切な人を
傷つけたりもしました。

その「何か」に
無意味はなくて、
数ある選択肢から
私たちは未来を作っている

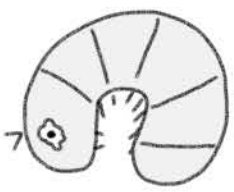
ぎゅーぎゅーと
世界からの圧迫を感じる夜

生まれても一人

誰か一人でも
違う選択をすれば、
違う過去が、違う未来が
生まれていく



そんな時は、
ダンゴムシのように
まるまって眠ります。



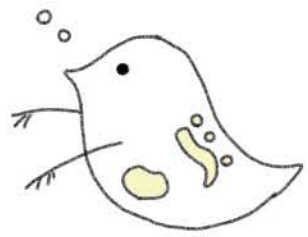
死んでも一人

受け取り
受け継ぐこと
それが「人」として
生きる意味だと思います。

参考文献：「樹木希林 120 の遺言 ~ 死ぬときぐらい好きにさせてよ」樹木希林 2019 年 宝島社

徒然落書き帳
「月の秘密」

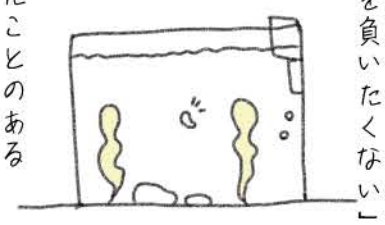
こちらは、
「僕はミジンコ」と
思い込んだミジンコです。



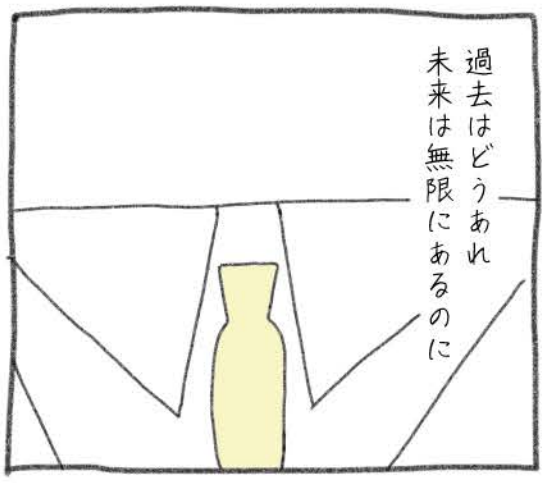
過去と未来ばかり見て
今を見失うのは
なぜなのでしょう

「月が綺麗ですね」が、
愛の告白なんて…

ミジンコは、
「責任を負いたくない」とか
聞いたことのある
言い訳を並べます。



過去はどうあれ
未来は無限にあるのに



そんな訳ないでしょ〜って
誰でも思いますやん

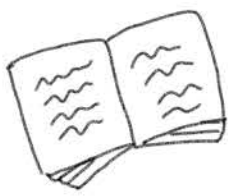
それは無知だからではなく

「今」の選択の積み重ねが
未来を作るのに

未来を作るのに

でも、過去の夏目さんが
そういう定義に
しちゃったんですよね

いろんな過去（物語）を
知っているから



そうなるんですよね

揺るぎない確定事実は、

「死」という結末だけです。

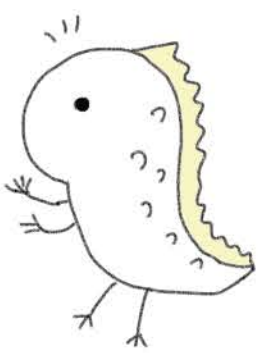
過去にそういう概念を
定義したから、

事象を超えた意味が
生まれてゆく。

さらに、その過去（物語）の
結末も知っているから

怖いという。

ミジンコも、いつのまにか
ゴジラとかに
進化するかもしれません。



（そのままでも大好きですが）

※101回目のプロポーズ